

目的 襟は衿長着の襟先に構成され、形態上重要なポイントをしめ、曲線を描く場所として得難い所である。この襟の縫製は技術の評価の対象となる。襟は裾衽寸法と襟の長さによって形態が形造られている。襟の形態には笹襟、柳襟、蛤襟などの名称がつけられているが、ここでは襟の形態を襟先の位置、裾衽寸法、襟の長さを指定し機械的に作図を行ない、それらの可縫製、更に布地の特性による縫製上の影響について検討を行なう。

方法 裾衽寸法を2mm, 3mm, 4mm, 6mm, 8mm, 10mmとし、襟の長さは裾衽寸法の2倍、2.5倍、3倍、3.5倍を取り上げ、襟先が裾衽寸法の1/2線上に定まるように設定し、衿下線は布目を通して直線になるように表の縫い止り点および引糸の位置を定め作図を行なった。なお、布地の組合わせは①表…綸子、裏…錦紗 ②表…細、裏…細 ③表…細、裏…モスリンを用い、裾衽寸法4mm, 6mm, 8mmにより実物製作をし、比較検討を行なった。

結果 衿下は布目を通して直線に仕上げることに襟先点を裾衽寸法の1/2線上に定めることとは形態、縫製共に作図の通り実施して可能であった。布地の組合わせ②では裾衽寸法4mm, 6mm, 8mmで襟の長さ2倍と裾衽寸法6mm, 8mmで襟の長さ2.5倍の場合、③では裾衽寸法6mm, 8mmで襟の長さ2倍の場合は、いせ込み分量が多過ぎ縫製上困難であった。